

幕末明治の写真師列伝 第十二回 下岡蓮杖 その十一

翌朝、久之助は朝早く起きると、撮影機材に向かい思い悩んだ上で一枚の写真を撮ってみたが、やはりうまく写らず、ぼんやりとした写真が撮れただけだった。続けて二度、三度と試してみたが、やはりうまく写せない。ついに午後となり、残りの薬剤もあと二、三枚ほどしか写す量がない。久之助は食事ものどを通らず、気力も衰えて、倒れると物も言うこともできなかった。そうこうするうちに、少し気力も出て、再び写真を試みた。すると今度はきちんとした画像が撮れている。久之助は歓喜して喜び、妻の美津の喜びもひとしおであった。

そこで久之助はすぐにこの写真を持って友人の所に行き、この写真の出来栄えを見せて、いくらかの金を借りることにして、その金で再び写真撮影に必要な薬剤を購入することにした。ところが、この当時はまだ輸入された必要な薬液がなく、また仮にあったとしても久之助の方ではその薬液の名前もよく判らなかつた。もちろん薬剤店の方でも写真撮影に必要な薬液があることも知らない。エーテルや硝酸銀のような医師が使用するような薬液はあるが、医師もまたこういう薬液が写真撮影に必要な薬剤とは知らなかつた。久之助はそこで大変困ってしまったのではあるが、かろうじて何とか必要な薬液を少しは手に入れることができた。

さて、万延元年（1860）、日本最初の遣米使節として、日米修好通商条約の批准書交換のために派遣された使節団の、正使・新見伊賀守正興（しんみ いがのかみ まさおき）、副使・村垣淡路守範正（むらがき あわじのかみ のりまさ）という人たちがいる。遣米使節のことは、克明な航海日誌（『村垣淡路守公務日記』、『遣米使節日記』とも）にも詳しく書かれているが、彼らはアメリカで何度も写真に写されて体験し、写真のことをよく知っていた人々であった。そのため、狩野董川の弟子・董圓という者が、写真術を修めて横浜に



遣米使節団ワシントン海軍造船所見学の記念撮影
(前列右から3人目が新見伊賀守正興、4人目が村垣淡路守範正)

居るということをごどこからか聞き、この者を呼び出して写真を撮って貰うことにした。この董圓という者こそ、もちろん久之助のことである。久之助は横浜から江戸に呼び出されて出張撮影することになったのだが、この時に戸川播磨守（とがわはりまのかみ）もまたこれを聞いて、久之助に写真を写して貰ったという。さて、この戸川播磨守とは誰か調べてみると、幕臣で、目付、長崎奉行をへて天保の改革の際に勘定奉行を勤めた戸川安清（とがわ やすずみ）という人物がいるが、この人であろうか。戸川安清であれば、この人は慶応2年（1866）12月に剃髪隠居し、子の中務少輔が早世しているため、その跡目は養子（孫）の八百次郎に継がせた人で、慶応4年（1868）3月4日に死去していることから、久之助が江戸に出張撮影で行った時は、慶応2年（1866）12月以前のことが、それとも慶応4年（1868）3月4日以前のことになるが、写真が残っていないためよく判らない。この時にはまだ輸入品の鶏卵紙がなく、久之助は複写の紙焼きを通常の西洋紙に塩を引いて、鶏卵紙の代用にすると述べているが、これもよく判らない。

（森重和雄）